



## 本田：中～後期の水管理と追肥

早場米の水稲は、まもなく幼穂の分化が始まります。幼穂形成期は環境の影響を強く受ける時期です。そのため、適切な水管理で低温の害を防止するとともに、穂や根の発達を促進します。また、適切な追肥はイネの栄養条件を良くし、穂（もみ）の発達と充実を促します。幼穂分化期から収穫期までしっかりした管理を行い、高品質・多収をめざしましょう。

### 1. 中干し後～出穂期の水管理

中干しが終わったら、間断かん水（入水を止め自然落水とし、田面が乾く前に入水する）を行いません。間断かん水は、水稲に水と酸素を十分供給し、幼穂と根の発達を促します。特に、出穂期前後は水を多く必要とする時期なので、田面が乾かないように細心の注意が必要です（水持ちが悪く、乾きやすい水田は湛水管理とします）。

※出穂期とは、田んぼの全部の穂の半分ぐらいが出た状態を言います。

### 2. 冷害対策のための水管理

最近では温暖化にともない、冷害（不稔もみが発生する障害型冷害）の発生は少なくなりました。しかし、梅雨の時期は一時的に気温が下がる時があります。特に、出穂前24日ころと15～11日ころは、低温（17℃以下）に弱い時期です。この時期に低温が予想されたら、幼穂が水の中にかくれるくらいの深水にして、幼穂の周辺が17℃以下にならないように保温する必要があります。最低気温が17℃以下になるという予報が出た時は注意しましょう。

### 3. 出穂期以降の水管理

水稲は幼穂形成期から出穂後にかけて十分な水が必要です。特に出穂期から30日間は、水が不足しないように注意する必要があります。根が最後まで健全であるためには、酸素の供給が必要なので間断かん水として土中に酸素を供給しますが、イネに水が不足しないように、田面が乾く前に入水するようにします。水が不足すると乳白粒などが多くなり、玄米品質が低下したり、倒伏しやすくなったりします。出穂後30日まで間断かん水を行うためには、しっかりした中干しにより土を固めておく必要があります。

### 4. 追肥（穂肥）

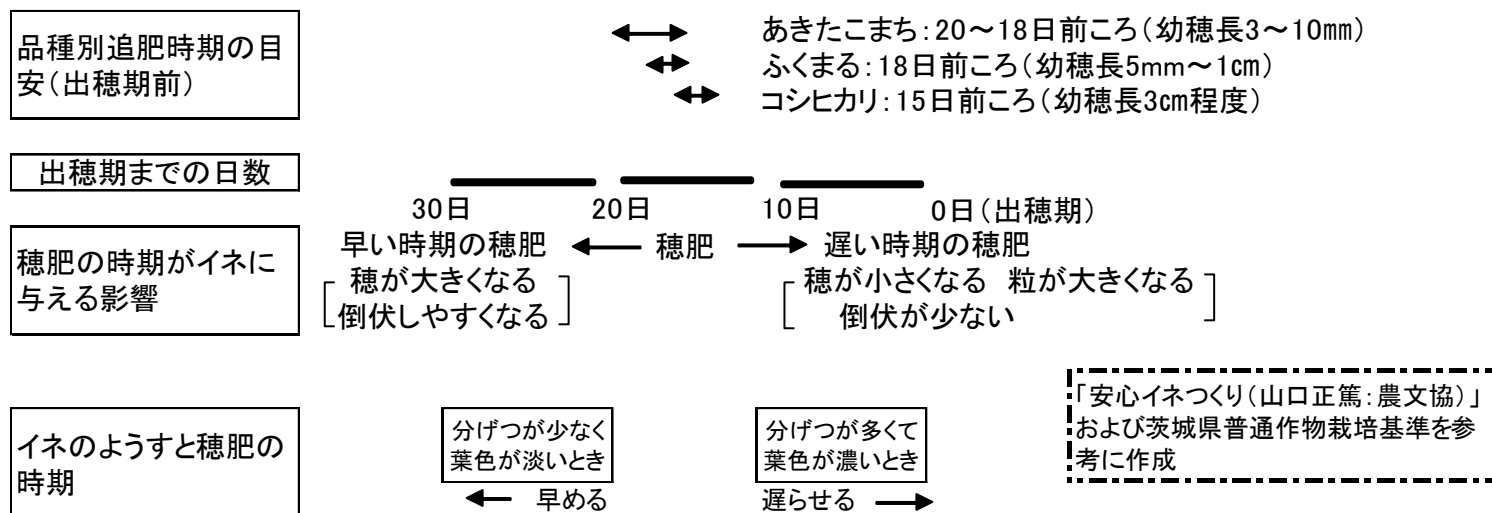


図 穂肥時期の影響と施用の考え方

穂肥はイネに栄養（チッソ）を供給することにより光合成力を強くし、品質・収量を高めます。しかし、施用する時期で効果が違ってきます。出穂期に対して早い時期の穂肥は、穂が大きくなります（もみの数が多くなります）が、玄米は小さくなりがちです（千粒重が軽くなります）。また、早い時期の穂肥ほど倒伏しやすくなります。それに対して遅い時期は、穂が小さくなります（もみ数が少なくなります）が、玄米は大きくなります（千粒重が重くなります）。さらに、玄米タンパク質は増加する傾向があります。

以上のことから、品種の特性に合わせて追肥適期の目安（出穂期前日数）は図のように決められています。幼穂の長さを参考にして出穂期を予想し時期を決めます。その時の幼穂長は図を参考にしてください

施用量の基準は、「コシヒカリ」は10aあたり窒素1～2kg、「あきたこまち」と「ふくまる」は2～3kgです。

穂肥の施用は葉色板で4.0程度が適切です。しかし、イネの生育状況に合わせて施用時期や量を調整します。生育が旺盛で分けつが多く葉色が濃い（葉色板で4.5以上）時は基準の施用時期より遅くし、施肥量も少なめにします。葉色が淡い（同3.5以下）時は施肥時期を早くし、量も多めにします。

なお、全量基肥肥料を使用した場合、穂肥は施用しません。

※幼穂長は、平均的な株を数株選び、株の太い稈（分けつ）を抜いてきて、カミソリやカッターで稈の基部をていねいに半分で割って図ります。

■ 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

■ 営農 NEWS は J A 全農いばらきホームページでもご覧になれます。